亜は心をゆり動かす

「亜」ほど大した用途もないのに意外に使われている漢字はほかにないのではないか。「亜」本来の意味は「次ぐ、あいむこ（姉妹の婿同士の呼び方)、みにくい」などで、その意味で使うのは「亜硫酸」など化学薬品の名称や「亜流」「亜熱帯」「亜麻」くらいのものだろう。

二番目とか実体が本質的でないものという意味しか持たない文字だ。清廉好きで陰が嫌いな日本人の国民性からするとあまり触れたくない文字ではないか。

その昔は「亜細亜」と表記するときは 1 単語に 2 度も出現したのだが、アジアがエイシアなどと英語風に呼ばれるようになってからすっかり見なくなった。そう言えば亜細亜石油という石油元売会社があったが、今は合併し大手石油元売会社を構成する一部になっている。「亜」の使用例で最も人目につきやすかった「亜細亜」も消えかかっている。

でも JIS－X0208 のトップを切っている文字である。

では何に多用されているかというと、人名なのだろうと思う。

「ア音」は陽性の音で明るいイメージを持つために好かれる音である。この音を含めた和語で名称を構成することが多い。

終戦直後とくに女性の名前を平仮名で表記することが流行(はや)ったことがあったが、現代は絶対漢字だろう。漢字の訓読みを使って「愛子、綾子、明子、朝子、敦子」など書くのがまず考えられる。

そのうち、これらの使い古した漢字に飽きた親が出てきた。自分の子供には独自性のある名称を付けたいと思うのは親心である。そこで 1970 年代と思うが流行しだしたのが「当て字方式」である。漢字の表音文字的使用、または万葉仮名風使用である。

実際に「亜」を使った名前を見てみよう。

亜以・亜依・亜伊・亜衣・亜紀・亜希・亜樹
亜貴・亜季・亜喜・亜輝・亜規・亜記・亜妃
亜沙・亜紗・亜佐・亜砂・亜早・亜左・亜都
亜津・亜矢・亜也・亜耶・亜哉・亜彩・亜弥

これだけ使われていて全く得体の知れない字はそうはない。

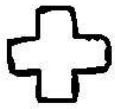
「ア」音を表現する漢字には何があるだろうか。日本人がア音の「仮名」を作り上げる

ときに元にした文字は「安・阿」であった。ほかに「愛」「悪」があるが、「亜」は見たことがない。「亜」は本来名前に使われるだけの佳字なのだろうか。冒頭言ったような意味合いしかないとしたら名前に使うのは変ではないか。一体「亜」は何から発生した字形なのか。

「亜」は不思議なイメージを持つ字形である。それが点対称であり、上下・左右線対称、シンメトリックでオーソドックスに見えるからか、直線だけで構成されるからか、何に起因するかはわからない。同じような発想の字形に「凸・凹」があるが、これらは見ていて微笑ましい。それに較べて「亜」は裏に何かを隠しているような気がする。

「亜」の本来の字形は「亞」である。

「亞」の甲骨文は右図の通りである。つまり「亞」は「十字」にほかならない。人形(ひとがた)であろうとされる。



殷墟発掘の写真を見たことがあるだろうか。ご記憶にあれば王墓発掘中の写真を頭に描いて欲しい。地表の高いところから撮ったもので上空からではないので斜めに地表を見ているのが辛いが、発掘した穴は十字形になっていたはずだ。

30 年も前のことと思うが、広東近郊で比較的新しい古墳が発掘されたことがある。その墓室は横穴式で、羨道の途中に門が設けられている。その門は十字形に切られていた。中華料理店の装飾で入口を丸く切ったのをよく見かけるが、あの丸が十字形になっていると思っていただければよい。これは殷墟での地平的「十の字」を立てたものと考えてよいと思う。

十字というとまるでキリスト教のトレードマークと取られがちだが、世界のどの民族でも持っている宗教的シンボルであり、人形・星・生命の木・生命・女性などの表象とされる。魂の再生を願う形である。

同義を表象するものとして、ヒンドゥ教・仏教の「卍（スワスチカ)」しかり、エジプトの「クルックスアンサータ（把手付き十字：右図)」しかり、十字形である。クルックスアンサータは千手観音がどれかの手に持っていたと思う。日本でも乳児の額に赤く×印をつける「アヤツコ」の神事がある。卍の本来形と言われる右マンジ（卍の裏返し）を 45 度曲げたハーケンクロイツを自らのシンボルとしたヒトラーは十字の異様さに惹かれたのかもしれない。

漢和字典によっては「亜」は殷墓の形という解説をつけているのがあるが、逆に死者の魂の復活を願うからその形で墓を造ったとも言っている。とすれば古代中国においては

「亜」は生命の復活を願う聖なる文字なのであり、禁忌の文字ではない。佳字である。

「亜・亞」は、次ぐもの・みにくい・独自の本質を持たない似たもの、などという意味が本質ではない。永遠の命を願う宗教観に根ざした文字である。字典でも忘れかけている遠い昔の記憶が私たちの染色体に染み込んでいて、私たちに不思議な感動を呼び起こすのかもしれない。

この著作権は岡和男に帰属します。
©Kazuo Oka 2000